

一番楽しいことを 学べる学校



Ogura Yuuri
小椋由織
1年

私は長野県の中学校出身で、地元美術専門の公立高校がなかったため、京都に銅駝美術工芸高校があることを知り、中学3年生の春に受検を決めました。家業が漆芸関係ですが、小さい頃から絵を描くことが好きだったので、自分が一番楽しいと感じる日本画専攻を選びました。

美術高校はみんな内気で、静かに作品を作っている印象でしたが、実際は積極的な人が多く、互いに相手を認めつつ競い合うという切磋琢磨な雰囲気です。道具や設備も本格的なものが揃っているので、この1年で実力もついてきたと感じています。今は岩絵具の質感にとても興味を惹かれています。もちろん普通教科の授業もわかりやすく、ただ美術高校らしいのは、普通教科の課題も美術に関わるように、夏休みの英語の課題は私には絵日記とか、国語は美術関係の文章などを例題にもらえるので関心が高まります。美術の先生は個性的で、それぞれの感じ方や答えの違いがまた視野を広げられ興味深いです。



将来、家業を継ぐかはわかりませんが、伝統工芸に携わるか、職人になりたいと考えています。

プライベートも趣味の切り絵や、京都に来たので茶道を習い充実にしています。優待券などを活用して美術館巡りも楽しんでいます。朝起きや食事、掃除、洗濯など一人は大変ですが、それ以上に銅駝での授業は楽しいので入学してよかったと思っています。



知らない景色の中に チャンスあり!

両親が銅駝出身で、僕も小学生の頃から絵を描くことが好きだったので、受検は当たり前を決めていました。銅駝1本で他の普通高校は一切受けていません。

銅駝は期待通りおもしろい学校です。仲間も個性が強く、みんな何か「持って」いるのでこだわりもあるし、流されない意思を感じる。それが刺激であり学校が楽しい理由でもあります。銅駝の風潮なのか、男女の垣根

があまりないので男子生徒が少なくてもあまり気にはなりません。僕は陶芸専攻ですが、立体造形にも興味を持ち、経験を重ねながら最終的には彫刻を考えています。将来は自分のやりたいことをやって、吸収する力を身につけ、何事にも関心を持ち、それを絵の技術として発信していきたい、ものづくりに携わる生き方を目指しています。

受検生に対しては、僕は人生で一度ぐらい、まったく知らない世界に身を投じてみていいと思っています。勇気はあるけれど、そこで力がつけばまた次の興味や関心が湧いてくる。その意味で銅駝はチャンスがある学校です。見たことのない景色の中で、自分なりにアンテナをはって過ごす高校生活はきっと充実するでしょう。



Hasama Gokuu
迫間悟空
2年
陶芸専攻



例えば絵がうまく描けなくても、人間関係の良さが学校の魅力の一つなので、美術の才能に関わらず、やる気があれば受け入れてくれる風潮のある学校です。自分と違う意見にふれることはスキルになり力になります。美術の向上だけでなく、交流する力も育つ学校です。

美術家を 目指して海外へ



Ozaki Aroha
尾崎アロハ
3年
アート・フロンティアコース
洋画専攻



中学時代はラグビー部でフォワードのリーダーだったので、実は高校から誘いもありました。でも母親が銅駝に行きたかったのと、もともと絵が大好きだったのでこの学校を受検しました。

当初は絵以外に取り柄がない自分に悩みましたが、2年生から美術にのめり込み、3年生からは社会へと意識が外に向き、アート・フロンティアコースに進みました。個性が強い生徒が多く、自分をしっかり持っている中身の濃いクラスは面白かったです。

春からは大学ですが、将来は美術家を目指すべく、ものづくりに携わり、逆輸入を求めて海外でも発表していきたいです。

よく美術で食べていけるのかと心配されますが、僕は手段を選ばなければ美術でも生きていけると実感しています。ただ自分が本当にやりたいこと、周りが求めていることの兼ね合いは難しいですね。日本は海外に比べるとまだまだ美術は社会に根付いていないし、特別視されています。絵心がないと美術はだめと思われがちですが、子どもが希望する道ならぜひ親は応援してあげてほしいと思っています。

2年の時に派遣されたヨーロッパ研修では、人間性が変わるほどの刺激を受け、ものの見方や制作物も変わりました。それまでは何を発信したらいいのか、さまよっていましたが、荘厳な教会を見て、宗教をテーマに作家活動をしていこうと決意するきっかけになりました。

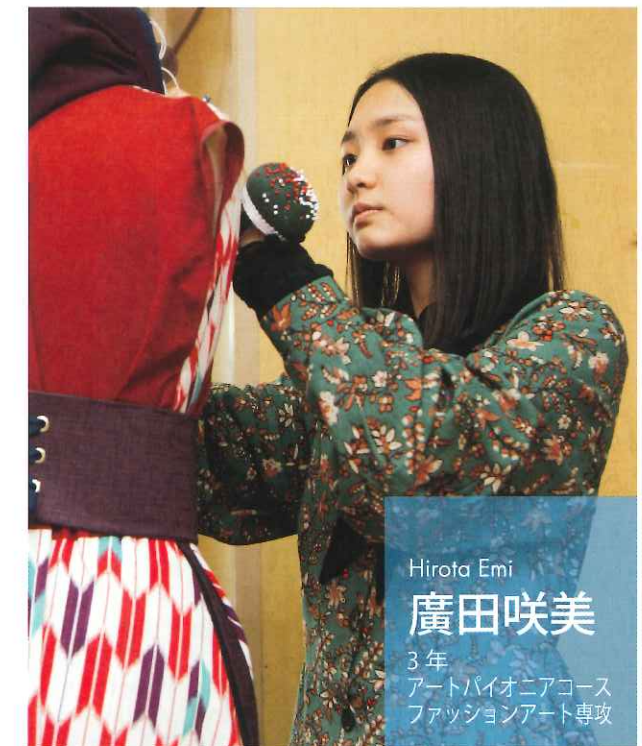


自分を表現できる 「道具」と出会えた3年間

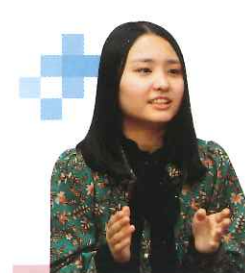
小学6年生の時に開催した美工作品展のファッションアートの作品を見て、その時から入りたいと思っていた学校でした。入学後はミシンもうまく使いこなせませんでした。最後には自分で洋服も作れるようになりました。ファッションは「着るもの」というイメージですが、アートがつくと自己表現の手段となります。自分らしく生きていくための「道具」が見つかったと思っています。先生方も親切で、大学受験科目のデッサンでは、私は画塾に通っていませんでした。先生方がサポートいただき、停滞期で落ち込んでいる時も励ましてくださいました。

春からは金沢美術工芸大学に進みます。将来はいろんなワークショップに出たり、子どもや高齢者と一緒に作品を作ったり、展示や海外交流などいろんな夢に向けて、やりたいことは片っ端からやって自分の世界を広げたいと思っています。

銅駝に入ったから美術しかできないなんてことはありません。ここは好きなことを突き詰めて、やりたいことを応援してくれる学校です。銅駝でしか経験できないことがたくさんあるのでぜひそれを楽しんでください。



Hirota Emi
廣田咲美
3年
アートバイオニアコース
ファッションアート専攻



アートバイオニアコースは勉強も実技も試験もやるのが多く大変でした。先生方に支えられてなんとか乗り越えられました。おかげで力がつき自信にもつながったと感じています。忙しい時ほど成長できる時。頭はフル回転でしたが、大きなチャンスだったと今は思えます。